

各関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について（送付）
平成 2 5 年度発生予報第 5 号を下記のとおり発表しましたので送付します。

平成 2 5 年度病虫害発生予報第 5 号（8 月予報）

I 向こう 1 ヶ月の気象予報：平成 2 5 年 7 月 2 6 日福岡管区気象台発表（単位：％）

予報対象地域	要 素	低 い (少ない)	平年並	高 い (多い)
九州北部全域 (含、山口県)	気 温	1 0	3 0	6 0
	降 水 量	4 0	3 0	3 0
	日照時間	2 0	4 0	4 0

II 【今後、注意すべき病虫害】

1 発生の概要

作物	病虫害名	発生予想		予 想 の 根 拠			備 考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
早植え 水稻	穂いもち	並	やや少	並 (±)	並 (±)	気温高(－) 降水少(－)	
	斑点米カメムシ類	並	並	並 (±)	並～少 (－)	気温高 (＋)	
	トビイロウンカ	やや多	並	やや多 (＋)	並～少 (－)	気温高 (＋)	予察灯：少(－)
チャ	チャノミドリ ヒメヨコバイ	並	並	並 (±)	並～少(－)	気温高 (＋)	茶研調査 やや少 (－)
カン キツ	黒点病	やや少	やや少	やや少(－)	並～やや少 (－)	降水少(－)	果樹研ほ場 やや少 (－)
	ミカンハダニ	並	並	やや少(－)	やや多～並 (＋)	降水少(＋)	果樹研ほ場 並 (±)
	カイガラムシ類	並	並	-	やや多～並 (＋)	気温高(＋)	

果樹全般	果樹 カメムシ類	やや多	やや多	-	多～少 (±)	気温高(+) 降水少(+)	各予察灯・フェロモントラップ調査 生産研 やや少(-) 果樹研 並(±) 天農研 多(+)
夏秋 トマト	すすかび病	並	やや多	少(-)	並(±)	気温高(+)	
	灰色かび病	やや少	少	やや少(-)	並(+)	降水少(-)	
イチゴ 育苗床	うどんこ病	並	並	やや少(-)	やや多～並 (±)	降水少(+) 気温高(-)	
	ハダニ類	並	並	やや少(-)	やや多(+)	気温高(+)	
夏秋果 菜類	コナジラミ類	並	やや多	トマトやや 少(-)	トマトやや 多(+) ナス並(±)	気温高(+)	
	アザミウマ類	並	並	-	ナスやや多 (+) キュウリ少(-)	気温高(+)	
夏秋キ ャベツ (高冷地)	コナガ	やや多	やや多	多(+)	並(±)	気温高(+) 降水少(+)	フェロモントラップ調査 山都町少(-)、 阿蘇市やや少(-)
野菜類 全般	ハスモンヨトウ	並	並	トマト・イチゴ並 (±)	ナス・トマ ト・イチゴ並 (±)	気温高(+)	フェロモントラップ調査 合志市・八代市や や多(+)、 山都町並(±)、 阿蘇市一の宮・波 野やや少(-)
野菜類 全般	オオタバコガ	並	並	トマト並(±)	トマトやや多～ 並(+)、イチゴ 並、ナス並～ やや少(±)、	気温高(+)	フェロモントラップ調査 阿蘇市やや多(+) 合志市・八代市・ 山都町やや少(-)

※予想の根拠末尾の括弧書きは、(+)は発生を助長する要因、(-)は発生を抑制する要因、(±)は影響が少ない要因であることを示す。

2 予想発生量、根拠、対策等

◎早植え水稻

1) 穂いもち

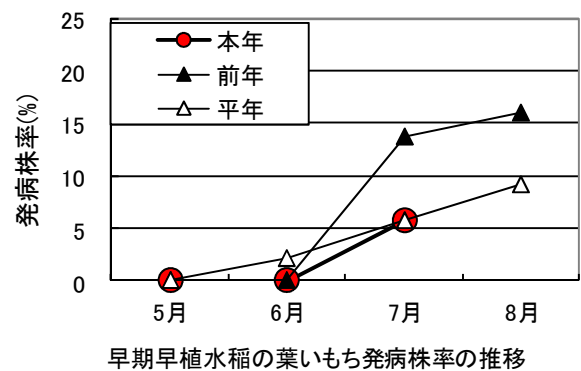
(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、葉いもちの発病株率5.8%（平年5.8%）で平年並の発生であった（±）。
イ なお、一部で多発のほ場が見られた（+）。

(3) 対策 ア 穂いもちは、発生後の防除が困難なので、予防防除を徹底する。

イ 粉剤、水和剤は、穂ばらみ期から穂揃い期に散布する。粒剤は、薬剤によって使用時期が異なるので注意する。

ウ 箱剤でストロビルリン系殺菌剤（QoI剤）を使用したほ場では、本田防除では本系統薬剤は使用しない。



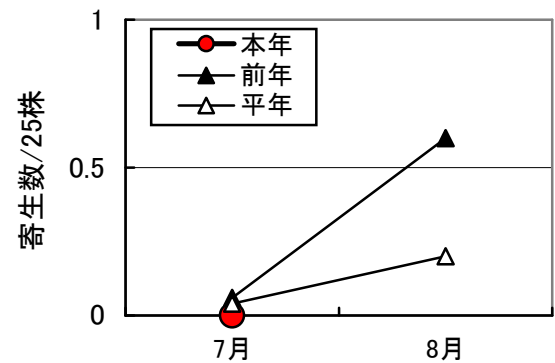
2) 斑点米カメムシ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、25株当たり0.06頭（平年0.04頭）で平年並の発生であった。（±）

(3) 対策 ア 出穂後に除草するとカメムシ類が水田内に侵入するので、周辺雑草の除草は出穂前に行う。

イ 周辺より出穂が早いほ場は、飛来が多くなりやすいので注意する。



3) トビイロウンカ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、早期早植え水稻で0.12頭（平年0.04頭/株）で、平年比やや多の発生であった（+）。

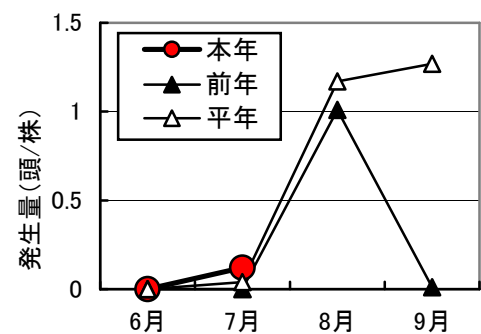
イ 合志市のネットトラップでは、6月18日に初飛来を確認し、その後、6月25日、7月5日と飛来を観測した（±）。

ウ 合志市での6月1半旬～7月4半旬までの累積誘殺数は19頭（平年114頭）で平年より少なかった（-）。

(3) 対策 ア 本年のトビイロウンカの防除適期（第2世代幼虫ふ化揃い期）は、8月下旬～8月下旬と予想される（平成25年7月12 日付技術情報第7号参照）。

イ 水田における発生状況を確認し、成幼虫数が要防除密度（7月下旬～8月上旬 20 頭/100株、8月中旬～下旬 100頭/100株）を超える場合は防除を行う。

ウ 水稻の株元に生息しているので、粉剤及び液剤で防除する場合は株元に達するように散布する。



◎チャ

1) チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 発生量：並

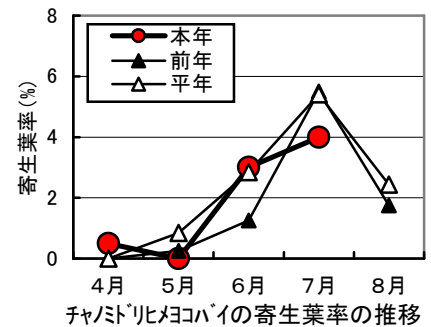
(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率4.0%（平年5.4%）と平年並の発生であった（±）。

イ 茶業研究所（御船町）のたたき落とし調査では、7月第1～4半旬の捕獲頭数が8頭（平年16.8頭）と平年比やや少の発生であった（－）。

(3) 対策 ア 新芽が加害されるので、萌芽～1葉期に防除する。

イ 本虫の経済的被害許容水準は、被害芽率5～8%以下である。

ウ 発生時期が重なるチャノホソガ、チャノキイロアザミウマとの同時防除を行う。



◎カンキツ

1) 黒点病

(1) 発生量：やや少

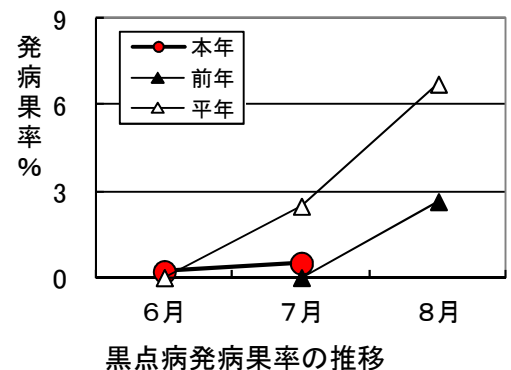
(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では発病果率 0.5%（平年 2.5%）と平年比やや少の発生であった（－）。

イ 果樹研究所の予察ほ場では、7月第5半旬の発病果率は 56.0%（平年85.4%）と平年比やや少の発生であった（－）。

(3) 対策 ア 保菌率が高い直径5～10mmの枯枝は、剪除する。

イ 剪定枝は、伝染源になるので園外に処分する。

ウ 前回の散布から累積降水量が200mm～250mmを越えた時期に防除を行うが、本年は降雨が少ない状況が続いているので、前回の散布から30日経過したら必ず防除を行う。



2) ミカンハダニ

(1) 発生量：並

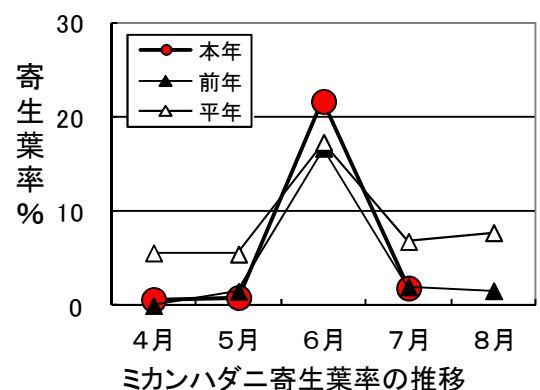
(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、雌成虫の寄生葉率 1.9%（平年6.9%）、寄生頭数 1.0頭/10葉（平年3.6頭/10葉）と平年比やや少の発生であった（－）。

イ 果樹研究所の予察ほ場では、7月第5半旬の雌成虫の寄生葉率は2.0%（平年0.8%）、寄生頭数0.3頭/10葉（平年0.2頭/10葉）と平年並の発生であった（±）。

(3) 対策 ア 定期的に園を観察し、雌成虫の寄

生葉率が30～40%、または雌成虫の寄生頭数が10葉当たり5～10頭に達した場合は防除する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーション使用する。



3) カイガラムシ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 防除員の報告では、平年比やや多～並の発生であった（＋）。

(3) 対策 ア 薬剤防除は、効果の高い幼虫発生初期に行う。

・アカマルカイガラムシは7月下旬～8月上旬頃。

・ナシマルカイガラムシは7月下旬～8月中旬頃。

イ 枝葉の混みあった所や通風採光の悪い園に多発するため、せん定、整枝、間伐を行う。

◎果樹全般

1) カメムシ類

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 7月第1～4半旬の誘殺数は、下表のとおり合志市が平年比やや少、宇城市松橋が平年並、天草市が平年比多であった（＋）。

イ ヒノキ球果の1果当たり口針鞘数は、県内9地点(熊本市河内、宇城市松橋、宇城市三角、合志市栄、天草市有明、天草市本渡、天草市栖本、天草市新和、苓北町)の平均が6.2本(平年2.0本)と平年より多かった（＋）。9地点のうち、最も多かったのは宇城市三角の15.0本であった。

(3) 対策 ア ヒノキ球果から離脱する(樹園地への飛来)目安となる口針鞘数は、1球果当たり平均25本である。7月下旬の口針鞘数からヒノキ球果から離脱する時期は8月23日頃と予測された。

イ 果樹園への飛来初期は局在し、発見が遅れやすい。園内をよく見回り、早期発見および発生初期の防除に努める。

各地域におけるカメムシ類の誘殺状況(7月第1～4半旬合計)

地域名	チャバネアオカメムシ		ツヤアオカメムシ	
	予察灯	フェロモントラップ	予察灯	フェロモントラップ
合志	46 (82)	72 (171)	4 (22)	0 (0)
松橋	74 (81)	171 (337)	173 (30)	3 (3)
天草	3,300 (143)	4,874 (390)	812 (115)	87 (4)

単位：頭、() は平年値

◎夏秋トマト

1) すずかび病

(1) 発生量：並

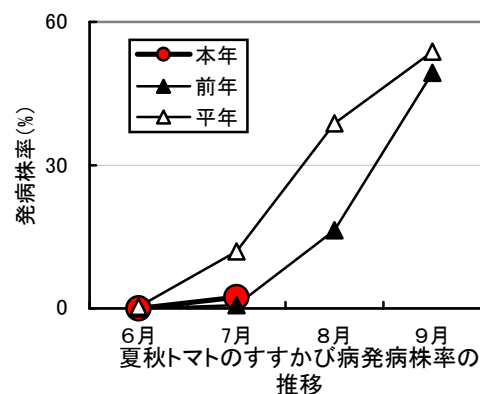
(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病株率2.3% (平年11.9%) で平年比少の発生であった（－）。

(3) 対策 ア 肥料切れしないように、適性な肥培管理に努める。

イ 換気を良くし、過湿防止に努める。

ウ 被害葉や被害果、老化葉は早めに除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。



2) 灰色かび病

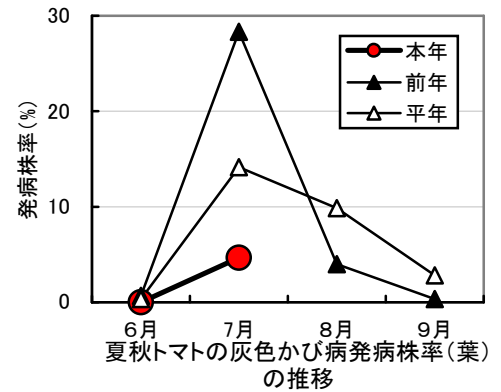
(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、葉の発病葉率4.7%(平年14.1%)、果実では発生を認めず(平年2.0%)、ともに平年比やや少の発生であった(－)。

(3) 対策 ア 通路灌水を行う場合、施設内の湿度が高まるので特に換気に注意する。

イ 被害葉や被害果、老化葉は早めに除去する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。



◎イチゴ育苗床

1) うどんこ病

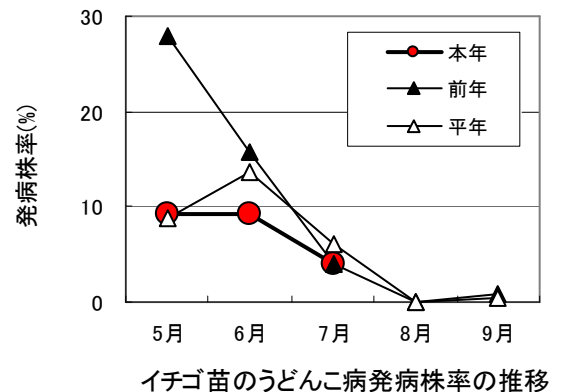
(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、苗の発病株率4.0%(平年6.1%)で平年比やや少の発生であった(－)。

(3) 対策 ア **盛夏期には新葉への病勢進展が抑制される。この時期に発病葉や不要な下葉などを取り除き、ほ場で処分し、9月以降の伝染源を少なくする。**

イ **定期的に予防防除を行う。**薬剤防除は葉裏に十分かかるように散布する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。



2) ハダニ類

(1) 発生量：並

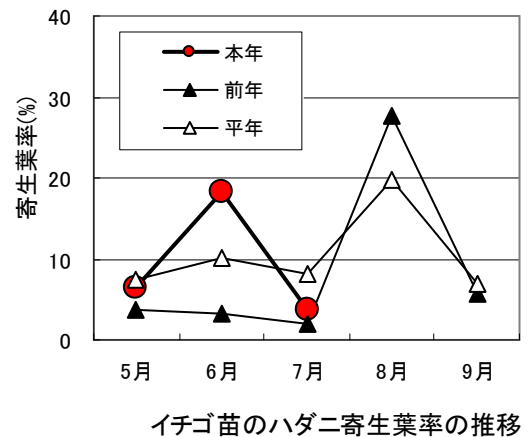
(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、親株の寄生葉率3.7%(平年8.1%)で平年比やや少の発生であった(+)。

(3) 対策 ア 寄生葉を早めに取り除き、ほ場で処分する。

イ 寄生密度が高くなると防除が困難なため、発生初期から防除を徹底する。

ウ 薬剤は下位葉の葉裏にも十分かかるように散布する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。



◎夏秋果菜類

1) コナジラミ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、トマトで寄生葉率4.7%(平成15.8%)で平成比やや少の発生であった(一)。

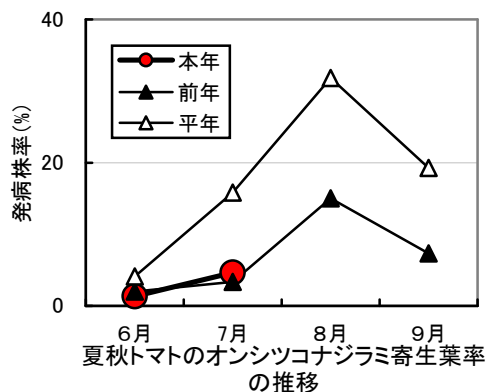
(3) 対策 ア 気温が高くなると増殖しやすくなるため、現在発生しているほ場では、早期に防除する。

イ タバココナジラミは、トマト黄化葉巻病、ウリ類退緑黄化病、スイカ退緑えそ病の病原ウイルスを媒介するので、トマト、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する(3防除のポイント等の「野菜のウイルス病対策」を参照)。

ウ 施設内部の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

エ 黄色粘着トラップ等を施設内に設置し、早期発見に努める。

オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。



2) アザミウマ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の防除員報告は、ナス平成比やや多、キュウリ平成比少の発生であった(±)。

(3) 対策 ア これから更に気温が高くなると施設内での発生が多くなるので、粘着トラップ等を設置し、早期発見に努め、発生初期からの防除を徹底する。粘着トラップの色は、ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色を使用する。

イ ミナミキイロアザミウマはウリ類黄化えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する(3防除のポイント等の「野菜のウイルス病対策」を参照)。

ウ 施設内の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

◎夏秋キャベツ(高冷地)

1) コナガ

(1) 発生量：やや多

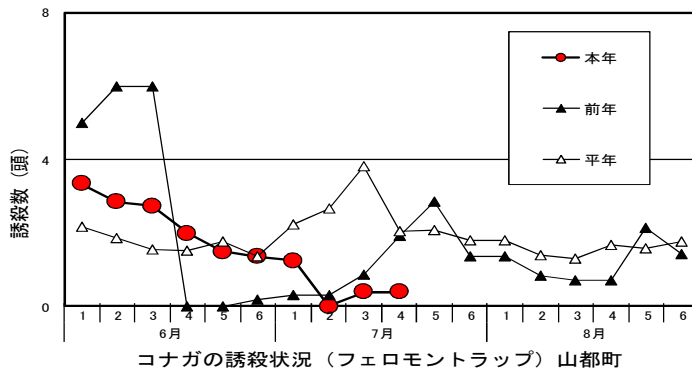
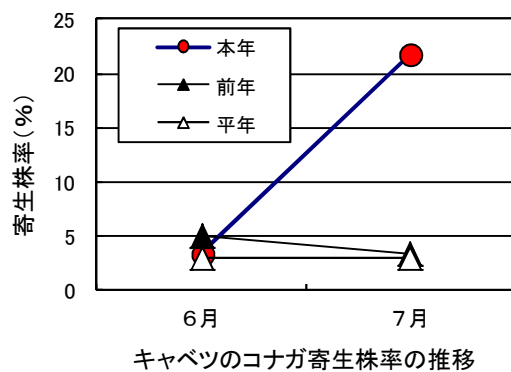
(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生株率21.7%(平成3.0%)で平成比多の発生であった(+)

イ フェロモントラップによる誘殺数(7月第1～4半旬累計)は、阿蘇市波野が8頭(平成12頭)で平成比やや少、山都町鶴底が2頭(平成10頭)で平成比少であった(一)。

(3) 対策 ア 早期発見に努め、初期防除を徹底する。特に、結球開始時に密度が高い場合には、防除を怠ると結球内部に入り込んでしまい防除が困難となるため注意する。

イ 栽培面積が広い場合(3～5ha以上)には、性フェロモン剤の利用も有効である。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。



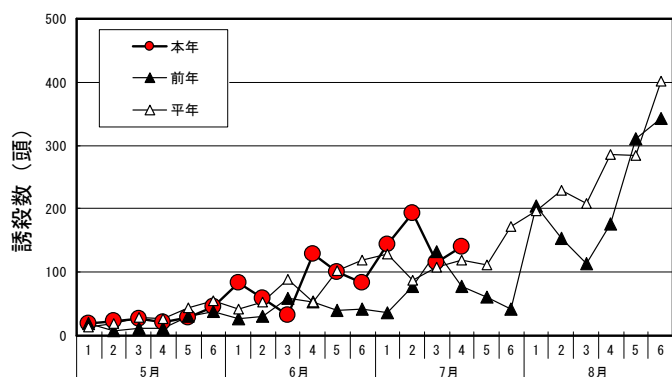
◎野菜類全般

2) ハスモンヨトウ

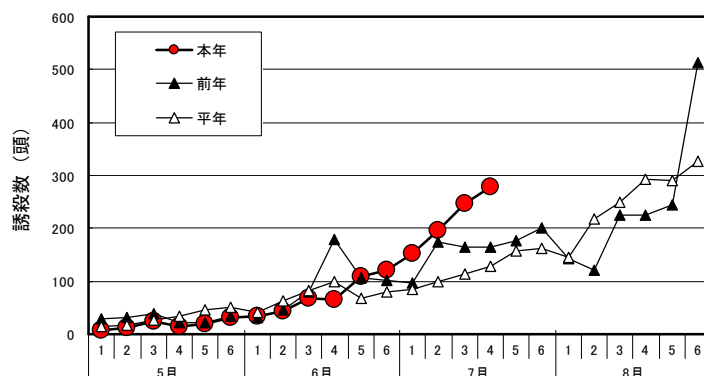
(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、トマトで発生を認めず(平年の寄生株率0.0%)、イチゴで寄生株率0.3%(平年0.2%)で平年並の発生であった(±)。

イ フェロモントラップによる7月第1～4半旬の誘殺数は、八代市鏡町が874頭(平年426頭)、合志市栄が594頭(平年445頭)で平年比やや多、山都町鶴底が75頭(平年91頭)で平年並、阿蘇市一の宮が325頭(平年578頭)、阿蘇市波野が61頭(平年82頭)で平年比やや少であった(±)。



ハスモンヨトウ誘殺状況(フェロモントラップ) 合志市



ハスモンヨトウ誘殺状況(フェロモントラップ) 八代市鏡

(3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期に防除を行う。

イ 施設栽培では、成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。なお、ネット上に産卵し、ふ化幼虫が施設内に侵入することもあるので注意する。

ウ 卵塊や分散前の若齢幼虫を発見したらただちに除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

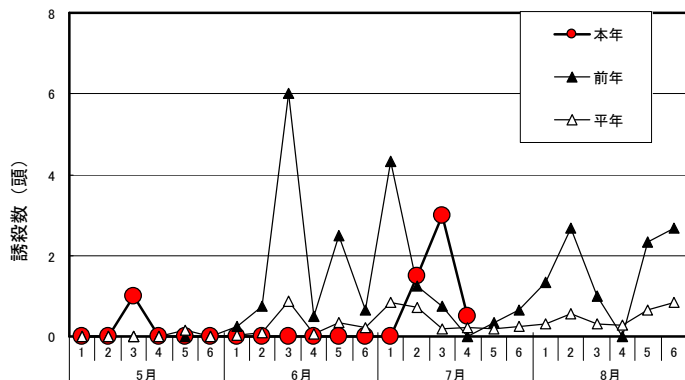
2) オオタバコガ

(1) 発生量：並

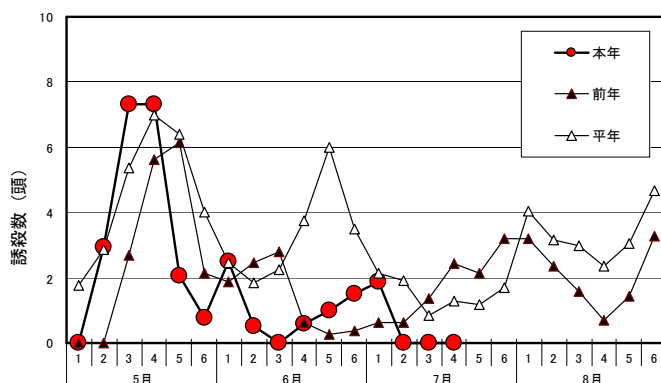
(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、トマトで発生を認めず(平年0.1%)平年並の発生であった(±)。

イ フェロモントラップによる6月第1～4半旬の誘殺数は、阿蘇市一の宮が5頭(平年2頭)で平年比やや多、合志市栄が23頭(平年68頭)、八代市鏡町が3頭

(平年 5 頭)、山都町鶴底が 2 頭(平年 6 頭)で平年比やや少であった(土)。



オオタバコガ誘殺状況 (フェロモントラップ) 阿蘇市



オオタバコガの誘殺状況 (フェロモントラップ) 山都町

(3) 対策 ア 施設栽培では、成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。

イ 1 卵ずつ産卵するため、卵での発見は困難。幼虫は、花や果実、頂芽を好んで加害するため、よく観察し被害が拡大する前に防除する。果菜類では果実内部に、結球する葉菜類では結球内部に食入し、薬剤がかかりにくくなるため、食入前の早期防除を徹底する。

ウ 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を行う。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

3 防除のポイント等

野菜のウイルス病対策

～「入れない」対策を徹底しましょう～

本県では「トマト黄化葉巻病」、「キュウリ・メロン黄化えそ病」、「キュウリ・メロン退緑黄化病」「スイカ退緑えそ病」などのウイルス病が発生しています。これらの病気の原因となる各ウイルスは、コナジラミやアザミウマ等の微小害虫により媒介されます。

これからの時期は、微小害虫の活動が活発になり、さらに抑制栽培等の定植も始まるため、育苗期や定植直後にウイルスに感染するリスクが高まる時期です。

そこで、以下の対策を必ず行いましょう。

I. 保毒虫を栽培ほ場に「入れない」対策

上記のウイルス病は、微小害虫がいなければ感染拡大しません。そこで、野外から微小害虫を施設内に入れないようにしましょう。感染が早ければ早い程、経済的被害は大きいので、特に育苗期の対策はしっかり行いましょう。

□育苗期

- ① 育苗ハウスは、本ぽと別に設け、ハウスの開口部(サイド、換気部など)には必ず目合い 0.4mm以下の防虫ネットで、天井部は近紫外線除去フィルムで被覆する。
- ② 雑草および野良生えは微小害虫のすみかとなるため、育苗開始10日前までにハウス内・周囲から除去する。
- ③ ハウス内に粘着トラップを設置し、侵入した害虫の密度を低下させる。
- ④ 発病株は二次伝染源となるので、見つけ次第直ちに施設外に持ち出し処分する。
- ⑤ 定植 2～3 日前に、苗の株元に登録のある粒剤を処理する。

□本ぼ定植以降

- ① サイド開口部は目合い0.4mm（アザミウマ対策の場合は目合い1mm以下）防虫ネット、谷換気部は、目合い1mm以下の防虫ネットで被覆する。
- ② ハウス周辺に雑草および野良生えが残っていると、微小害虫が飛び込みやすくなるため定植10日前までに除去する。
- ③ 育苗ハウスから本ぼへ苗を運ぶ際には、野外の微小害虫が付かないように運搬車等の荷台を防虫ネットや幌等で覆う。また、定植作業中は、出入口をきちんと閉めて作業する。
- ④ 育苗期後半に株元粒剤処理ができていない場合には、定植時に登録のある粒剤を必ず処理する。

イチゴ育苗床での病虫害の発生を防止しましょう。

1. うどんこ病

盛夏期には潜在感染し、菌そうが見えなくなる。定期的に予防防除を実施し、菌密度を下げる。

<防除対策>

- ①発病葉は早めに取り除き処分する。
- ②薬剤防除は葉裏に十分かかるように散布する。
- ③薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

2. 炭疽病

保菌親株から苗への炭疽病菌の伝染および苗での炭疽病菌のまん延を防止するため、以下の防除対策を徹底しましょう。

<防除対策>

- ①育苗床は必ず雨よけを行う（寒冷紗は雨よけにならない）。
- ②育苗床は、冠水しないように排水対策を講じる。
- ③頭上灌水は避け、株元に手灌水にする。
- ④定期的に予防防除を行う。特に、降雨後、摘葉後、ランナー切除後は感染しやすいので、必ず防除する。
- ⑤発病株は早期にほ場外に持ち出し、ビニール袋に入れるか、土中深くに埋没処分する。

Ⅲ 【その他の病害虫】

作 物	病 害 虫 名	発生予想 (平年比)	発生概況及び注意すべき事項等
早植え	紋枯病	やや少	巡回調査は平年並の発生（±）。 要防除水準は穂ばらみ期の発病株率20%である。 粉剤、水和剤は穂ばらみ期から出穂期に散布する。粒剤は出穂30～10日前に処理するが、薬剤によって使用時期が異なるので注意する。
早植え ・普通期	コブノメイガ	やや少	巡回調査では平年比少の発生（－）。 水田での発生状況を観察し、要防除水準(第1世代幼虫による被害株率が20%以上)を超える場合は防除する。 (平成25年7月25日付け技術情報第8号参照)
普通期	葉いもち	やや少	巡回調査は平年比少の発生（－）。 上位葉への進展が見られる場合は、薬剤防除を行う。
	紋枯病	やや少	巡回調査は平年比少の発生（－）。 8月の気温が平年より高く推移した場合は多発する傾向があるため、発生状況に注意する。 要防除水準・防除時期等は早植えに準じる。
	トビイロウンカ	並	巡回調査では、平年並の発生(±)。 水田での発生状況を確認し、成幼虫数が要防除密度(7月下旬～8月上旬 20頭/100株、8月中旬～下旬 100頭/100株)を超える場合は防除を行う。
チャ	炭疽病	並	巡回調査は、平年並（±）。 防除員報告は、平年比やや多～並（＋）。 常発地では摘採残葉の発生に注意し、新芽生育期に予防防除を行う。
	チャノキロアザミウマ	やや少	巡回調査は、平年比少（－）。 防除員報告は、平年並～少（－）。 トラップ調査 生産研：並（±）、茶研：やや少（－）
	チャノコカモンハマキ	やや少	巡回調査は、平年比やや少（－）。 防除員報告は、平年並～少（±）。 フェロモントラップ調査 生産研・球磨農研：少（－）茶研：並（±）
	チャノホソガ	やや少	巡回調査は、平年比少（－）。 防除員報告は、平年並～少（±）。 フェロモントラップ調査 生産研・茶研：やや少（－）、球磨農研：少（－）

	カンザワハダニ	並	巡回調査は、平年比やや少（－）。 防除員報告は、平年比並～少（±）。 茶業研究所の予察は調査では、平年並（±）。
カンキツ	かいよう病	やや少	巡回調査は、平年比やや少（－）。 果樹研究所の発生予察ほでは、平年比やや少（－）。 防除員報告は、平年比やや多～やや少（－）。 伝染源となる発病葉や枝、果実は除去する。 ミカンハモグリガの食害痕に発生しやすいため、防除及び被害葉の除去に努める。
	チャノキイロ アザミウマ	やや少	巡回調査は、平年比やや少（－）。 防除員報告は、平年並～少（－）。 黄色粘着トラップ調査では、やや少（－）。 果実（100果）を薄めた展着液または洗剤で洗い、捕獲された虫数が10頭を超えた場合は防除を行う。
ナシ	うどんこ病	並	巡回調査は、平年並（±）。 防除員報告は、平年並～少（－）。 高温・乾燥が続くと多発する。 早期落葉により樹勢が低下するので、予防防除を徹底する。
	ハダニ類	並	巡回調査は、平年比やや少（－）。 防除員報告は、平年比やや多～並（+）。 定期的に園を見回り、雌成虫の寄生葉率20%以上、1葉当たり1～2頭に達したら防除する。
夏秋トマト （高冷地）	葉かび病	やや少	巡回調査は、平年比やや少（－）。 防除員報告は、平年並（±）。 肥料切れしないように適正な肥培管理に努める。 抵抗性品種でも発病に注意する。
夏秋ナス （平坦地）	すすかび病	並	防除員報告は、平年比やや少（－）。 葉裏にも充分かかるよう薬剤散布を行う。
夏秋 キュウリ （高冷地）	べと病	並	防除員報告は平年並（±）。 肥料切れに注意し、適正な肥培管理を行う。
	炭疽病	並	防除員報告は平年並（±）、 窒素肥料過多に注意し、適性な肥培管理を行う。
イチゴ （育苗床）	炭疽病	並	巡回調査は、平年並（±） 病原菌の飛散を防止するため、ビニールで雨よけする。頭上灌水は避け、株元に手灌水する。 不要な下葉を除去する、育苗ポットの間隔を広げる等通風採光を良くする。（3 防除のポイント等の「イチゴ育苗床での病害虫の発生を防止しましょう」を参照）。

【野菜病害虫の共通対策事項】

- ・換気や排水を良くし、過湿の防止に努める。（病害）
- ・多発後は防除が困難になるので、早期に発見し初期防除に努める。
- ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

IV その他

農薬安全使用上の留意点

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう、飛散防止を徹底するとともに、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行なうなど、危害防止に努めましょう。

- ◎ 詳しい内容等については 病害虫防除所（生産環境研究所病害虫研究室）
（TEL：096-248-6490）にお問い合わせ下さい。

※なお、本文及び各種トラップのデータ等はホームページ「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」上に掲載しています。